⑧ 生産高(最近10年)	・約12万反から約20万反へ	・約3万反前後を継続
⑨ 月別生産反数	・農業に影響されなくなってきている	・農繁期に減少
⑩ 紬従事者分布	・村山産地内では限定 ・近隣市町村へ ・東北地方へ工場進出	・結城市内では全域 ・結城，小山以外にはほとんど広まらない

(筆者作成)

関東地方における神社信仰の地域性と重層性

小 寺 和 代

1. 研究目的

本研究では，日本人の生活を支え続け，神社を中心として展開されてきた信仰生活，信仰行動を神社信仰と定義し，この神社信仰が関東地方においてどのように相互作用してきたか，および信仰の相互作用の結果であり，日本の宗教の特質とされる重層性は，地域住民の生活の上にどのように表出しているかの2点を明らかにすることが目的である。

2. 研究方法

歴史学，宗教学，民俗学等の研究成果を利用して，神社および神社信仰の発展について概説したうえで，関東各都県で編集された宗教法人名簿によって作成した神社分布図，神社分祀圏図を資料として，神社分布，分祀圏の相互関係について考察する。さらに，氷川神社分祀圏内の地域を調査し，宗教法人となっている神社，小祠，境内社，講の重層状態を考察した。

3. 神社信仰の地域性

関東地方においては，氷川神社，鹿島神社などのように地域的に分布する神社（図1）と，稲荷神社，八幡神社などのように全域に分布する神社（図2）とがある。

それらの神社の最も古い形は，自然神であったが，そこから発展してきたいくつかの神社は，次第に信仰圏を広めていった。自然神の信仰を保ち続けた山岳信仰の神社（武尊神社，榛名神社など）は，一般に，最初は山麓各地で祀られていたが，仏教の影響によって，山頂に奥宮，本宮といわれるものが建てられ，これが山麓神社の本社と崇められるようになった。本社の経済基盤がしっかりしており，御師のような信仰を伝播させる人が発生してきた神社では，山麓神社の範囲を越えて，より広い地域

に信仰が広められる。この場合，信仰は講の形で広められることが多かった。講として信仰圏を拡大していく場合，本社はより広い地域に受けいれられるために，幅広い神徳を掲げて，信仰普及に努めなければならなかった。したがって同一神社の信仰でも，地域によって異なる形で受容される現象も生じた。大山の山岳信仰が，相模川流域では雨乞いの信仰として，埼玉県南部地域では初山参りの山として受容されているのはその例である。

また，山岳信仰のように自然神の信仰ではないが，地域的な分祀圏を持つ神社に，氷川，鹿島などがある。これらの神社もその成立時においては，自然神，地主神として発生したと考えられるが，有力な氏族に奉斎され，氏族の氏神となることで，分祀圏を形成するようになった。奉斎氏族から分かれた小集団が，それぞれの居住地に分祀していた頃は，氏族の神としての性格が保たれていたが，しだいに地縁集団の神として祀られるようになり，近世には村の産土神として，新村開拓などにともなって分祀が行なわれるようになってきた。

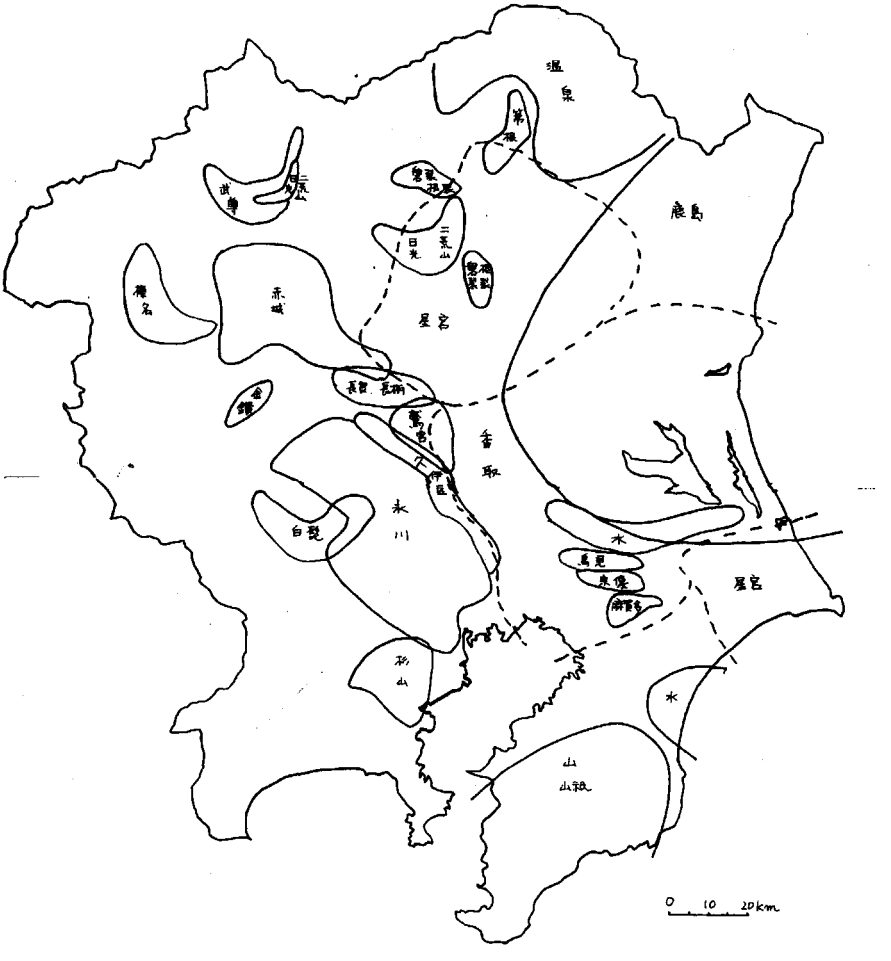

図 1. 地域的に分布する神社の分布範囲

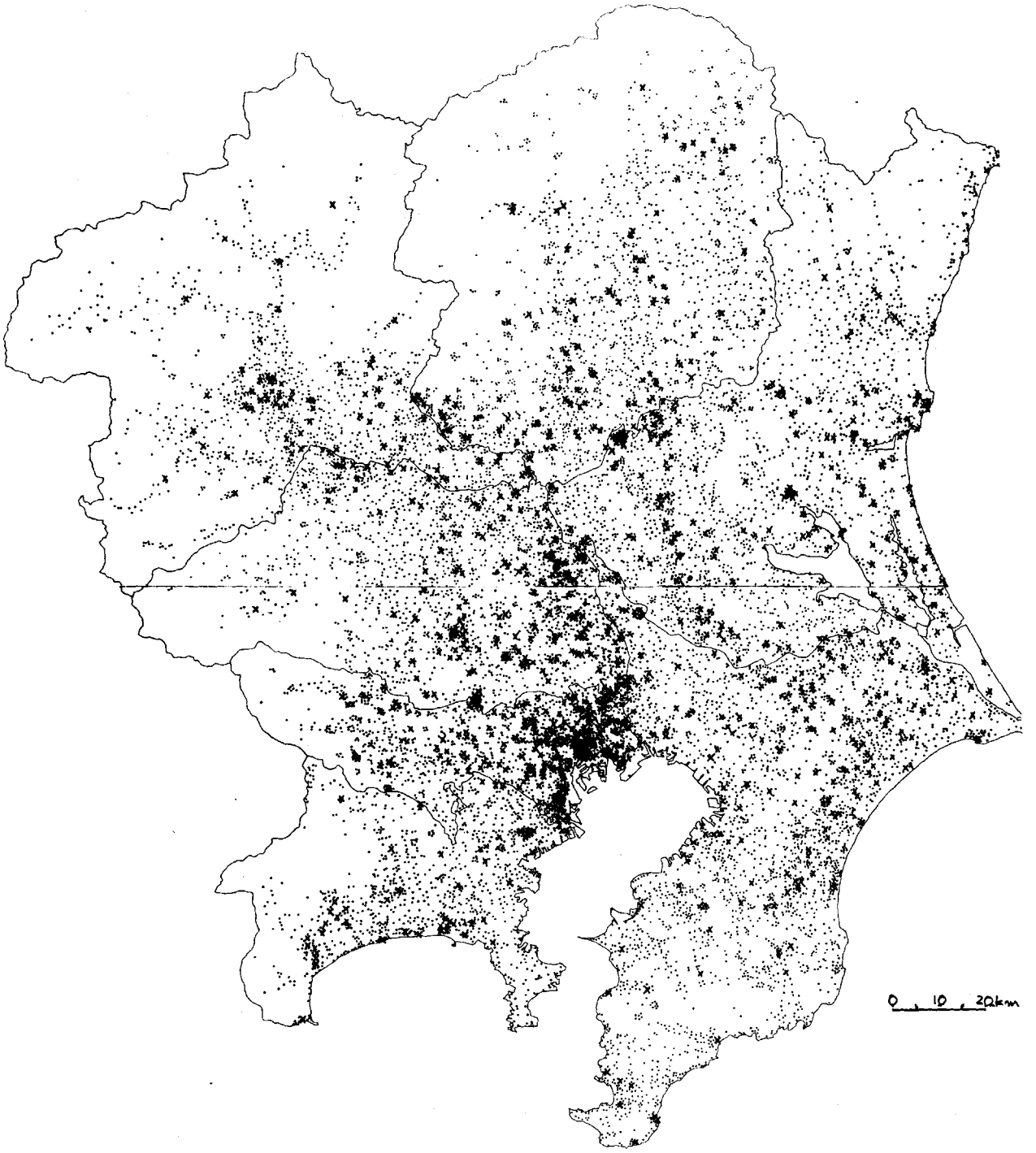

図 2. 関東地方の神社分布と稲荷神社

・神社　　×稲荷神社

氷川，鹿島などの神社は，分祀圏の広さがかなり早い時期に決定し，その後は分祀圏内の神社密度が高くなるという方向に信仰が展開された。しかし，関東地方全域に分布している外来神社信仰としての熊野，神明，諏訪などの神社は，信仰圏の拡張を続け，強力な御師集団などの力により，他地方にまで，あるものは，ほぼ全国にまで分祀圏を拡大していった。このような神社は，関東地方では従来の神社圏の間隙をうめ，また新村や人口が増加している地域にはいりこむという形で信仰を広めていった。それらの神社は都市では稲荷神社が，武士の間では八幡，諏訪神社が受けいれられやすいという傾向はあったが，神徳によって分祀圏を競合するほど，常民生活において神徳は重要ではなかったようである。農民にとっては生産を守護してくれる神であれば何でもよく，かつて武神であった神もこの時期には他に様々な働きを兼ね備えていると考えられるようになっていたため，御師のはいりこんだ地域や社領のある地域を足がかりに信仰は広められていった。したがって，神社間の競合は，祭神が本来持っているとされる神徳によるものというよりも，その信仰が拡張していった時期，神社側が様々な階層の住民に受容されるだけの多種の御利益を自分のものとしていたかという点によると言えよう。

4. 住民にとっての信仰の重層性

このように多くの信仰が様々な段階で一定地域に流入してきたが，それを受容した地域住民にとって，それぞれの信仰はどのように重層して受けいれられたのであろうか。

調査地域として取りあげた氷川神社圏は，関東全域に分布している八幡，稲荷神社などの分祀圏のなかに存在している。しかし，それらの神社は同じレベルで奉斎されている。つまり，氷川神社圏にあっても宗教法人となっている神社は，八幡神社であれ，稲荷神社であれ，住民にとっては同じ産土神として受容されている。

住民の信仰生活にとって重層として指摘できるのは，ムラにひとつのそれらの産土神と，ムラにいくつかある部落の鎮守としての小祠および講の関係である。小祠は成立から見れば，屋敷神に起源を持ち，屋敷神から一族の神へ，さらに部落の神へという変化をたどってきたものが多い。また，それらの小祠のほとんどは稲荷社と称している。一方，講は作神としての御岳講，初山参りの大山講が部落単位全戸加入の講であり，雨乞いの榛名講，雷除けの雷電講が有志によって結成される講となっている。これらの小祠と講は，共同体の運営や生産に関して実質的な機能を持っており，地域住民の生活をまとめてゆく役割りを果していた。このような産土神，小祠，講からなる三層の構造は，日本の農村に一般的に見られるものである。

さらに小さい単位としては，古い家，大きな家で祀られている屋敷神，屋内の神棚などがある。また近年は，初詣でや七五三に地域外の大社に行く人も多くなり，地域外神社と言えば代参で出かけていくだけだった形から，新たな地域外大社への参詣が定着してきたといえる。